

台湾は1895年から1945年まで51年間にわたり、日本の植民地統治を受けた。その間、台湾総督府は近代国家の国語制度を施行し、台湾人は日本語を学んで植民地体制との闘いの糧としたため、1943年には日本語理解者は島民の60%近くに達している。これにともない30年代台湾では、日本語読書市場が形成され、台湾人による日本語文学も本格化して、台湾人日本語作家の作品が続々と内地の総合誌、文芸誌で高評価を受け、台湾島内でも文芸誌が盛んに刊行された。日本統治期台湾日本語文学は、1930年代から40年代にかけて全盛期を迎えたといえよう。本論文は台湾日本語文学と日本文学との間にある影響関係を、台湾文学青年の日本留学、日本文学青年の台湾移民など相互の外地体験をも視野に入れて、詳細に論じたものである。

第一章「台湾文学運動における「文藝復興」」は、劉捷(1911-2004)と黄得時(1909-99)との二つの台湾文学史論における同時代日本文学評価を論じている。34年の劉論文は左派の視点から当時の文芸復興運動を日本プロレタリア文学の延長線として評価したのに対し、42年の黄論文は「中央文壇」と相対する「台湾文壇」を建設するために劉論文の論理を継承したという、それぞれの戦略性を明らかにした。

第二章「日本統治期日台文学における「憂鬱」の系譜」は、佐藤春夫『田園の憂鬱』(1919)刊行等により、日本文壇では20年代末から30年代にかけて「憂鬱」と「モダン」が結びつく一方、巫永福(1913-2008)、翁鬧(1910-40?)、張文環(1909-78)の台湾文学青年は30年代から40年代にかけて「憂鬱」をテーマとする「首と体」(1933)、「夜明け前の恋物語」(1937)、「憂鬱な詩人」(1940)を創作し、日台文学において「憂鬱」の系譜が成立した点を解明した。

第三章「日本統治期台湾文学における梶井基次郎の受容」は、龍瑛宗(1911-99)、葉石濤(1925-2008)らの梶井基次郎(1901-32)作品の読書体験から日本統治期台湾における梶井文学受容状況を考察し、神経衰弱による幻視、都市空間での彷徨などのテーマが巫永福「首と体」(1933)、張文環「山茶花」(1935)、翁鬧「残雪」(1935)などへと変容されていく過程を分析した。

第四章「日本統治期日台プロレタリア文学の交流」は、日本プロレタリア文学の代表的作家葉山嘉樹(1894-1945)の作品「淫売婦」(1925)と、台湾人作家と推定される琅石生「闇」(1935)との類似性を指摘し、台湾人プロレタリア文学作家が葉山の強力な影響下にあって、如何にして台湾独自の左翼文学を確立したか、という点を考察した。

第五章「坂口禰子と植民地台湾における「受容」と「排除」をめぐって」は、日本熊本県出身の日本人でありながら台湾文壇で作家デビューした坂口禰子(1914-2007)の台湾を舞台とする長編小説『春秋』『鄭一家』の二作(1941年4月、9月)を分析した。二作は共に戦時下の台湾総督府系の『台湾時報』誌上に発表されたにもかかわらず、「融合」と「排除」の間に彷徨う台湾人と日本人の心理的葛藤を描き出し、台湾人文壇へと同化している点を指摘した。

本論文は大正・昭和戦前期文学の複雑な展開と台湾日本語文学の成熟との影響関係を全面的に論じるには至っていないが、プロレタリア文学の興亡と「憂鬱」の系譜、そして日台作家の越境体験の三点を柱として、日本統治期日台文学交流史を立体的に解明した点を中心に顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。